上高井教育会報

第159号
発行所 上高井教育会
発行人 上高井教育会長 小林謙三
編集人 会報編集委員長 黒岩幹夫
印刷所 須坂新聞社

「本年度教育会のまとめ」

教育会の活動を振り返り

教育会副会長　荒井智雄

平成五年度上高井教育会は新会員二十名を迎え、会員数四百一名、総予算約一七五〇万円で出発し、年度当初の活動計画、諸行事が関係各位のご協力、ご指導、ご努力により、予定通り実施され、会員各位の向上に大きな成果を上げることができ、心より感謝申し上げます。

本年度の授業研究は、昨年度に引き続き研究テーマを「子どもにとってわかり、魅力のある授業のあり方」と設定し、それを目指す授業や研究内容として、

一、基礎的、基本的な内容を重視し、教材内容を深めた授業研究

二、一人ひとりの子どもに具体的な指導、援助とその評価のある授業

三、子どもが自らの追求課題を明確にしている授業

を設定して、四月に総委員会において、中心講師筑波大学助教授谷川彰先生に演題「関心・意欲を育てる授業づくり」でご講演をいただき、「関心・意欲とは」「教えるということ」「子ども一人ひとりが意欲的に学習する授業」「良い環境造りの条件」「学力のポイントは意欲」等の内容で具体的に指導してくださり、授業研究の方向性を示してくださいました。これを受けて、各研究委員会においてテーマにそって研究を深めていただき、谷川先生には、栗ガ丘小の理科・高山中の国語の授業研究について直接ご指導を仰ぎ、「新しい学力観」にもとづいたご指導で、意欲を大切にした授業の導入と展開段階の工夫、基礎的・基本的内容が学力として定着成長していく過程の把握と評価等について具体的にご指導いただいた。

他の教科領域の研究委員会においても、テーマに沿って助言者をお願いし、実践を通して研究を深めていただき、更に本年度の反省に立ち、課題を持って来年度も一層の研究を深め、発表させていく契機になったことと思います。

教師の資質向上の大切な研修の場であって、教育会活動のもう一つの重要な柱である同好会活動については、本年度は十五設置され、延人数約三百名入会し、それぞれ研究、研鑽に励まれてきました。毎年継続して中央や大学、先輩等の講師を招いたり、夏休みを利用しての夏期講座、予定日を活用しての調査研究、臨地講習、実技、読み合わせ等々各同好会の伝統の上に新しい活動を取り入れたり、先輩や同好の士への呼びかけ等、運営に工夫をこらした活動が見られました。

その成果を会誌・会報への寄稿、また研究発表会・展覧会等を通して発表されてきましたことは我々自身の研究のあり方と同好会の一層の発展を促す、良い刺激になってくれたと思います。

だが、反省点として「入会者が少ない」「同好会の参加者が少ない」等々のことが以前から提起されています。

社会一般から「生涯学習」・「専門職としての教師のあり方・資質の向上」が強くいわれているとき、自分自身のあり様を更に考えなければならない時ではないでしょうか。「自ら求める研修の場としての同好会」を造っていきたいものだと思います。

また、同好会日には各校で行事を入れないという約束ごとを守りながら。そして、同好会の回数、内容等について検討し、会員全員が参加できるようなものにしていきたいものです。

行事などについては、春の総集会には、意見発表として「信州教育に魅せられて」。講演に帝京大教授、大石勝男先生の「今、問われる教師の課題」についてのお話をいただき、我々教師のあり方について、自分の体験から出た、貴重なご示唆をいただきました。

また、秋の講演会では、郷土の先達であられる、科学技術庁宇宙研究グループ主任、中島厚工学博士の「宇宙開発とその有効利用―誰もが利用できる、身近な宇宙を―」で、科学の最先端を行く宇宙開発とロケットについて、具体的に宇宙の夢を語ってくださり、いずれも我々の視野を広め深めてくださりました。

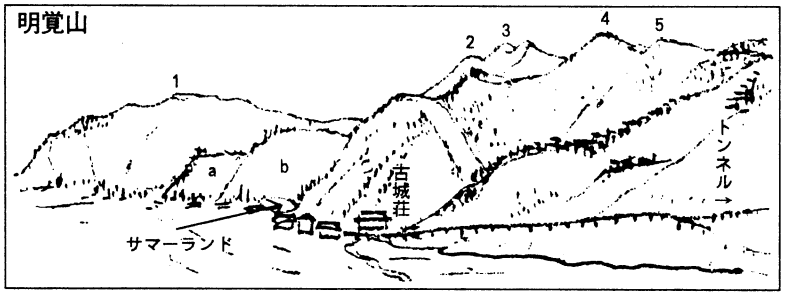
また、研究発表会でも、三人の会員から、自分の日々の研究実践について発表していただき、我々の教育活動に対する実践への意欲付けをしてくださいました。女教師研究委員会・研究大会においても、それぞれの立場で貴重な体験と意見をお聞きすることができました。教育の道は「耕不盡」といわれます。まさにそうだと思います。教育会の活動を「自ら求める研修・自己の教育力、資質の向上に務める」一つの場として大切にしたいものです。

（高山小）

須高の山と川④

雨乞いと城塞群の山―明覚山系

青木　廣安



百々川と松川が須坂でW字の複合扇状地を形成しているが、その中のくびれに突出するのが、明覚山（九五七・八メートル）を主峰とする山塊である。

須坂からは前山に当たる坂田山（八五〇）しか見えない。豊丘や高井側からも望めるが日滝側からは全望できる。スケッチは、常中東の大谷町から描いた。3明覚山の主峰、2が雨引城跡（地籍は日滝でなく、豊丘と高井の境界）4が坂田山稜につづき、5は古城にあたる。1の鞍掛山でその頂上尾根筋が大岩城跡。

古城荘北尾根が階段状になっているのは長野盆地の形成期における縁辺部の断層運動の形跡。古城・南原地籍の崖錐が奥に広いのも構造性がうかがえる。

明覚山の名称は中世的イメージを感ずるが不詳である。日滝側の山頂を少し下った山腹に湧水池と磐座があり権現様の石祠がまつられている。神木はトチの古木。かっては林をなしていた。今は杉木立ちになっている。日照りの年は区長・水利部長など区役が一升背負って雨乞いにのぼる。古代信仰の水分（みくまり）信仰に通じると考えられている。八木沢川の集水域は山が浅いだけに水不足を来す。奥峰に雨乞いに通じる雨引きがあり、御嶽社が鎮座する。中世修験山でもあった。

この山塊は城塞群の山でもある。須坂温泉古城荘は地籍名による山稜に郭や空堀がある。枝尾根の鞍掛山筋に大岩城跡があり、中世須田氏の本城で、蓮生寺は居館跡といわれる。高井水中の舌状尾根に月生城があり、水中・灰野峠の道には謙信道の伝承もある。

本年度の実践をふりかえって

本年度も残り少なくなりました。各校では一年間の教育実践を振り返り、反省やまとめの時期を迎えておられることでしょう。ここに、3つの研究委員会から貴重な教育実践をお寄せいただきました。今後の教育活動に生かしたいものです。

私たちの特殊教育研修

越　正行

―テーマに願いを込めて―

本研究委員会のテーマは、「互いにかかわり合いながらひとりひとりが自らの目当てに向かって意欲的に取り組む授業にするにはどのようにしたらよいか」であります。

子どもたちは、ややもするとひとりよがりな動きが多い。そのため、自らの目当てに向かって意欲的な取り組みをする上で互いにかかわることが、学習をどんなに意義深いものにするかを研究テーマにしてわたしたちの追求は始まる。

―単元の成立を大切に―

「常盤祭に展示した植木鉢をどうする?」という教師の問いかけに、子どもたちは、「どうする?」「〃 ?」と応えるだけだったが、「冬が来れば寒くてかわいそうだ。」「いらない棚に並べて温室みたいにしたら。」に変わり、温室作りに変化する。

やがて霜が降りるようになると「先生、どんな形にするの?」という子に続いて、それまであまり乗り気でなかったS生は、「おれ、一輪車で土運びする。」という。

ここまでくると子どもたちの動きは止められない。子どもたちの願いを何としてもかなえてやるしかない。まさに単元の成立です。

―目標に向かって展開―

①温室の設計　模型などを使ってイメージの確認。

②穴掘り　木枠が十分に入る穴を作ろう。

③木枠づくり　戸棚の枠を改良してガラスの覆いをうまく載せよう。

④仕上げ　まわりのすきまには断熱材を入れよう。温室の下には木の葉を敷こう。

⑤完成祝い　完成祝いには寿司を食べたい。

この展開は、一つ一つの段階が温室作りという目標に向かって互いにかかわれる可能性の見通しに立ち、一人一人の気持ちを温室作りに向かわせて今にも子どもたちが動きだしそうです。

―輝く目、光る汗―

《11／24　授業研究日》

○K生（三年男）

四角な木枠が入るように隅の方に気を配って穴を掘っている。土を一輪車に入れると、またもくもくとして掘っている。穴が大きくなっているのを見て大変嬉しそう。

○S生（二年男）

一輪車での土運びを大変気に入っている。一輪車に土が溜まると思い切り押していく。額にうっすら汗が滲む。

○A生（一年女）

木枠の釘打ちです。釘の頭をじっと見据えて打っている。打ち終わるたびに周りの先生から拍手を頂いて嬉しそう。

○ST生（二年男）

木枠の釘打ちです。ていねいに打ち最後は金づちの凸面で仕上げます。打ち終わると「やった。」と声が弾む。

―テーマに戻って―

春から秋にわたる息の長い学習は、子どもたちが互いにかかわり合いながら「この鉢どうしよう」という思いでやってきた。それが、「冬囲い」というところでみんなの力が一気に結晶したものと思われます。

（小布施中）

教育会だより

1・11　第2回研究委員会世話係委員長会

・20　第2回同好会世話係会長会

・22　第46回県女教師研究大会、於諏訪市駅前市民会館
上諏訪中学校、本郡参加　名

2・7　第8回常任委員会

・14　第9回代議員会

・19　第9回常任委員会

・26　上高井教育会報159号発行

・28　第10回代議員会・委嘱委員会事業報告

3・15　上高井教育会誌第50号発刊

保健体育研究委員会

原田　武夫

「ひとりひとりがわかり、できた喜びのもてる授業はどうあったらよいか」をテーマに据え、①基礎的基本的な内容の決めだし　②自発性を伸ばすための授業　③子供を軸にした学習展開　④中学校における選択制の取り入れ法などを主な内容として授業実践を通して研究を進めてきた。

第一回の研究委員会は上田教育事務所の熊谷正先生を迎えて、日野小学校5年で、水泳の実証授業を行った。

自分の力にあっためあての持たせ方と評価のさせ方を中心に実証を試みた。その中で明らかにされてきたことは、運動の特性に触れさせながら、個人差に応じた指導をして行く中で一人一人の力に合っためあてを持たせ、見通しをもって練習し、達成していくというサイクルを身につけさせていくことが大切であるという点であった。

担任が替わって三ヵ月余りだが、子供たちは、仲間と関わり合いながら自分のめあてに向かって一生懸命取り組む姿や、授業を終えたときの満足そうな表情が印象的であった。

第二回目の研究委員会は墨坂中学校で、長野北部中学校の小林健孜先生を迎えて選択制球技（サッカー、バドミントン）の取り入れ方についての実証授業を試みた。選択制の授業のねらいは生徒一人一人の多様な運動やスポーツへの欲求に対して、運動の楽しさや喜びをより深く味わわせるとともに、自分の能力・適正、興味・関心、欲求・態度などに応じて主体的に運動の行い方や楽しみ方を工夫していく能力を育成することである。そこで、生徒たちがどこに楽しさを求め学習を深めたいのか、子供の側から教材を分析し、ねらいに据えたことにより、技能差のある男女が共に協力して学習していく姿が見られた。また、主体的に学習していくために、単元全体の学習計画や、一時間の学習計画を元にチームとしての練習計画を立てて、どんな活動をどのように進めていくかをはっきりさせたり、めあてをチェックしたり修正したりできるカードを用意することにより、自分たちで考え、活動し、そして見返していく学習の一連のサイクルを意識しながら学習を進めていくことができた。

来年度も本年度のテーマを継続し、子供たちが更に主体的に活動していくことができるよう焦点を絞って研究を進め、テーマに少しでも近づけるよう授業を通して研究を深めて行きたい。（墨坂中）

本年度の委員会活動（英語）を振り返って

松山　哲郎

「郡研の委員長を引き受けてもらえないか」、という突然の電話から話は始まった。冗談ではない、寝耳に水、である。私のような門外漢にそんな大役が勤まるわけがない…。

と、いきなり個人的な話で申し訳ないが、これが我が英語委員会の不幸の出発であった。以下は前途多難に見えた委員会の活動の軌跡である。

テーマは「生徒ひとりひとりが喜びをもって言語活動ができるための指導はどうあったらよいか―聞く・話す活動を中心に―」であり、昨年度の継承である。

第一回目の研究授業は相森中学校の三年生で、授業者は伊藤由紀先生。題材は「it…to～」構文の導入である。郡内の六中学校だけで研究授業を回す英語委員会は、どうしても研究授業の回数が多くなる。その負担を少しでも軽くしようと、本年度から第一回目の研究授業は、ゲームを中心に教案もできるだけ簡素なものに、という申し合わせが昨年なされた。この授業はその第一回目の試みである。

授業にゲームを取り入れることは、確かに効果的であると言える。うまく仕組めば生徒の表情が何倍も生き生きとしてくるからだ。しかし問題点も当然ある。ただの「お遊び」になってしまったり、時間ばかりかかって力がつかなかったり、そして何よりも新しいゲームを考案するアイデアが不可欠であるし、準備もまた大変である。

授業ではまず「魚」「鯊」という二枚の漢字カードを用い「It is easy(difficult) to read…」の新表現を提示、文型練習の後、いよいよゲームが始まる。

「It is X for Y to ZW」のXYZWに入る語を選ばせ、各自が選んだ語をつなぎ合わせ文を作り、ポイントの高い文を作った班の勝利となる。同じ班でも隣の人が選んだ語は知らされていないから、自分の班の文は発表の段階まで分からない。語の選択肢は非常に工夫されており、「○○先生がgirl friendを作ることはdangerousだ」などという文が次々に出来上がり、教室は笑いと大歓声に包まれる。どの生徒も楽しみながら、しかもしっかりと新出事項を身に付けていく過程が手に取るように分かる授業だった。

第二回目の研究授業は、東中学校。これも今年度が初めての試みである。日本人教師同士のティームティーチングで行われた。授業者は高橋美佳先生と竜堀宏美先生、一年生の「進行型の導入」が題材である。

元気の良いあいさつで始まった授業は、二人の先生が半分に分けて同時のQ―A活動にはいる。学級の全員が短時間で先生との英語での会話ができる。TTの利点を生かした鮮やかな導入である。

新文型の提示は二人のスキットで始まる。一人暮らしの女の子と飼っている犬、という設定。良く練られた面白いスキットに先生方の熱演も手伝って、生徒たちは思わず引き付けられる。笑いながらも真剣に内容を聞き取ろうとする。見事に乗せられてしまったのだ。単語・文型練習の後、ここでもゲームが効果的に使われている。

絵の一部を見せて何をしているのか当てるゲーム。答えの意外性に教室は大いに湧いた。二人の先生は、スキットやゲームのときは共同で、練習の時は一人が机間巡視、と役割分担をし、生徒個々の学習の手助けをする。更にもう一つ、この授業の大きな特徴は、生徒のguessing（推測）を多用したことである。聞き取り、文型練習、ゲームのあらゆる場面で、ただ単純な反復練習ではなく、生徒が考えながら活動にしなければならない場面を設定している。言い換えれば、新しい表現を覚えさせるだけではなく、どういう場面・状況でその表現を使うかも一緒に学ばせているのである。軽快なテンポが一層効果をきわだたせた授業だった。

いま英語教育は様々な問題を抱えている。仮にこの研究が少しでも問題点に方向性を与えるものになったとすれば大いに幸いである。最後に、未熟な委員長を支えてくださった世話係、小委員会の先生方、そして何よりもすばらしい授業を見せて下さった授業者の先生方に、心からお礼申し上げます。（東中）

本校の宝④
開校八十周年記念校名額　須坂小学校

須坂小学校が大事にしているものの一つに記念校名額がある。

本年、創立百二十周年を迎え、歴史と伝統を育んできた本校の創立は明治六年十一月に溯る。明治五年八月の学制発布と同時に、中町にあった旧藩校「立成館」を襲用して、長野県第三十二番校「本立学校」として成立をみた。

校名「本立」の由来は「論語学而 第二」からとられ、「もとつたる」の意味である。「君子務本 本立而道生 孝弟也者其為仁之本与」とあり、「本を立る」の精神を生かして、本校の力強い出発の象徴としたのではないかと思われる。

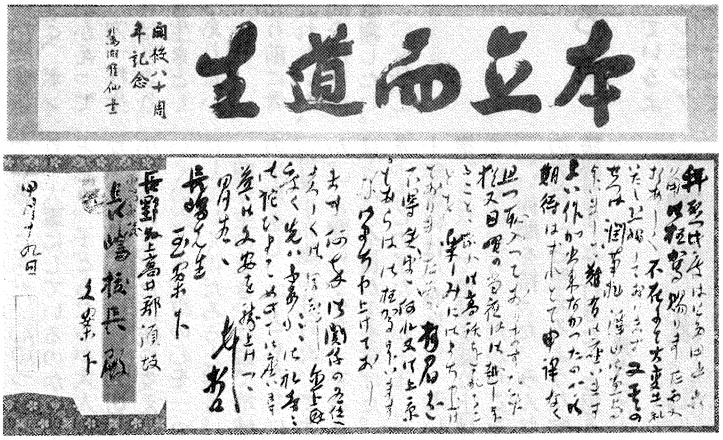
写真の記念校名額は、昭和二十九年、当時の学校長、長島亀之助先生の下で挙行された開校八十周年記念事業の一環として、東京在住の書家である津金哲先生により揮毫されたもので、この建学の精神は現在に至るまで継承され、本校の教育のまさに土台となっている。

また、もう一葉の写真は、その津金先生が、上京して不在で逢うことができず帰長した長島先生に宛てて書かれた御礼の手紙で、これまた名筆であり、校長室に掲額し併せて大事している。

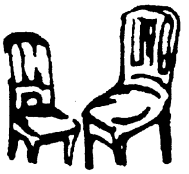
更に、本校の東に隣接する標高四九〇・一メートルの鎌田山は、校歌に「鎌田の山の松風に夕べ心を澄ましては」と歌われ、松やくぬぎに覆われた山肌は四季折々に変化し美しい風情を見せ、本校の子供たちを静かに見守っている。

子供たちは毎日、鎌田山とかかわり、学習の場とし、心のよりどころとしている。

こうした原風景を大事にし、本校の児童・職員は一緒になって本を立てるために日々励んでいる。（北島秀樹）



火ばち談義



マナーを守る

徳嵩　博樹

私の趣味はドライブです。そのドライブを通じ、いつも気になっていることを書きたいと思います。

それは、タバコの投げ捨てです。タバコの投げ捨てがいかに多いのか知らされるのは、夜間の交通からです。タバコがアスファルトにぶつかる瞬間、花火のような火花が散ります。いったい投げ捨てをどう考えているのでしょうか。

投げ捨てをしている人たちの普段の姿は世間一般にいう良識のありそうな人たちなのでしょうが、若いカップルや、妻子を連れた男性も多く、同乗者がいようといまいとおかまいなしで投げ捨てます。

一月下旬には、千葉県船橋市の駅ホームで投げ捨てタバコにより、女子生徒が失明寸前のケガを負いました。失明という大事に至らなかったことは、不幸中の幸いでしたが、それから一ヵ月間、千葉県内全JR駅ホームでのタバコの投げ捨て禁止の呼びかけが行われたそうです。当たり前のことを守れないことが一般化していることは大変に悲しいことです。

将来、そんな大人にならないための教育とは、どうあるべきなのか真剣に考える必要があるのではないでしょうか。

タバコは、灰皿に行くまでは、責任ある自分の持ち物です。それを辺りかまわず自らの手から離すことに戸惑いを感じない大人たちに比べたら、子供たちの投げ捨てやいい加減な清掃までもが、とてもかわいく思えてなりません。

学習面や運動面だけを鍛え抜いた者だけを敬いがちな世の中ですが、当たり前の小さなマナーを守れる人間こそを育てていくことが大切なのではないかと考えます。

子供たちは、大人たちの行動を素直に受けとめる純粋な心の持ち主なのです。

私自身、マナーについて考え学んでいきたいと思います。

（高山中）

夢

小林　仁子

少し前、友人と話していてこんなことを聞かされた。

「あなたの夢は何ですか。」と、その友は言う。私は突然のその質問に躊躇して、うまく答えることができなかった。

幼少の頃から思い起こせば、私も他の子と同じように、いろいろな夢を持っていた。花屋さんになりたい、お菓子屋さん・ケーキ屋さんになりたい、美容師さんになりたい、バスガイド・料理の先生・通訳・弁護士になりたいなど、いろんな夢を思い描きながら子ども時代、学生時代を過ごしてきた。その中の一つが、教師だった。あの頃から見れば、私は夢を叶えることができたのだろう。そしてその後夢なんて言葉で自分のこれからを意識したことがなかった。ちょっとキザに感じたり、照れくさかったりして、あまり、私自身には使わない言葉だった。しかし、それを今質問されて即答できない自分が少しショックだった。

『夢を持っている人』というと、何だか情熱的で、活動的で、素敵な人という感じがする。私もただの教師を目指したわけじゃなく、こんな先生になりたいという思いがあったからであり、今もそれは持っている。そしてそればかりでなく、ほかのことでもやりたいことはいくつかある。しかしそれがどの程度のものだったか疑問だ。

今担任している小学校二年生の子供たちに夢は何かと聞くと、サッカー選手、野球選手、ピアノの先生など、ポンポンと即座に答えがかえってくる。一日精一杯、力一杯生きている子どもたちは私より何倍も情熱的で生き生きとして見えた。私もこうありたいと思った。

本当は誰でも当たり前に考えていることかも知れないが、改めて私にこの質問を投げかけてくれた友人に感謝したい。

（仁礼小）

地域に思う

冨岡　ひろ美

先日、ふとテレビをつけると、野沢の道祖神火祭りが放送されていた。巨大なやぐらに火をつけさせまいと、厄年の男たちが体を張って守っていた。すざまじい火付け攻防戦のあと、抱き合いながら男泣きに泣いていた。「いい仲間を持った。みんなの力だ。」と言って泣いていた。その後村の厄をすべて焼き尽くすかのように、やぐらが勢いよく燃えていった。

私は、その中継を見ていて胸が熱くなる思いがした。祭りを精一杯成功させようとする中に、連帯感があり、そこに心のつながりがあったからだ。

今の子どもたちの世界に、道祖神祭りのような心のつながりが、少なくなっているように思えてきた。テレビやゲームなどの遊びが多くなってきているからだろうか。

しかし、今勤めている小布施の地は、伝統行事がいくつもあって驚かされる。ついこの頃は、安市で町がにぎわっていた。屋台が出たり、店を出す地区もあったようだ。また、各地区ごとにも祭りが催されている。子どもたちの日記にも「太鼓の練習に行った。」とか「去年は獅子の足だったけれど、今年は五年生だから獅子の頭で、がんばらなくちゃあ…。」「気持ちをそろえなきゃできないもんね。」などと書いてある。小布施がいいなと思うのは、子どもの頃からちゃんと伝統行事に参加しているところだ。心のつながりを大事にしているのかなあと思う。子どもたちが大人になっても、この経験を大切に小布施の文化と伝統を支えていくのだろう。町の心を一つにしていくのだろうと思う。

四年生のとき、社会で地域の学習をし、子どもたちに「将来小布施に住みたいですか。」と聞いてみた。するとほとんど全員が手を挙げた。きっとこの子たちが十年、二十年後には小布施の〝若い衆〟となって地域を盛り上げていくのだろう。だからこそ「いい仲間を持った。みんなの力だ。」と思えるような学級経営をして行きたいと思う。

（栗ガ丘小）

編集後記

本年度最終号の会報159号を「教育活動の総括」と「本年度の実践をふりかえって」のテーマで編集し、お届けすることができました。

本年度の実践を振り返り、まとめたものを大切にして、新たな展望をもって新年度を迎えたいものです。

学年末でお忙しいところ、快く原稿をお寄せいただいた先生方、本当にありがとうございました。

風邪が流行っております。お体に気をつけてお過ごしください。

（花形・森田）